

2022年5月16日(月)

老球の細道669号

バスケットボールと語学

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今シーズン最後のBリーグダイレクターの仕事で4月に郡山であった福島ファイヤーボンズ対山形の試合の時である。ゲーム終了後山形のマネージャーが私のところにやって来て突然話しかけて来た。「失礼ですが、葵高校でコーチをしていた室井先生ですか?」と。私は彼が葵高校の卒業生なのか思い出そうとじっと顔を見たが思い出せなかった。そして彼は、とまどう私を見て「私は高校時代、先生が葵高校で指導したK君やE君と一緒にドイツに行ってトステインのユーロアカデミーキャンプに参加した者です。今でもK君やE君とは連絡を取り合っています」と話してくれた。

山形のマネージャーはユーロアカデミーキャンプに参加したことがきっかけになって英語を勉強しようとしたのだろうか。今ではマネージャーの仕事だけではなく通訳も兼ねている。ちなみに福島ファイヤーボンズのマネージャー(ゴンザガ大学卒業)も通訳兼任である。さらに、何も関係はないと思うが二人とも高校は静岡県出身であった。外国人選手、コーチの多いプロリーグでは通訳もチームの大きな戦力となっている。

あちこちでクリニックを行うと必ず参加者から漏れる不満の声がある。私が話すポイントのキーワードが英語なのでよく理解できないと言う。バスケットボールは用語がほとんど英語なので、英語を知らなければバスケットを真に理解することはできない。

日本のトップリーグの選手やレフリー、世界を股にかけるトップアスリートたちは語学、特に英語に堪能である。いや、堪能にならないと生きていけない。世界中の色々な人たちとコミュニケーションをとらなければならないからである。

現在WNBAでプレイしている町田瑠偉選手に、かつてWNBAでプレイした経験のある大神雄子さんからのメッセージが月刊バスケットボールに掲載されていた。

「ガードは自分の言葉でしゃべって表現する『コート上のコーチ』。しかもアメリカではそれを英語で話さなければならないので、通訳がいたとしても大変なポジションです。自分の場合はエナジーやパッションが売りでしたが、そんな自分でも人見知りをしたのがWNBAという世界でした。言葉と文化が違う海外でプレイするという事は、そうした試練は当たり前にあることです」

先月スケート界から現役引退を表明した小平奈緒さんはオランダに留学した際、英語のみで事足りる中で、さらに選手同士のコミュニケーションを深めるにはオランダ語も必要だと感じ、単語帳を持ち歩いて言葉を覚えたという。

「オランダ語をしゃべるといっただけで、出会った仲間とたくさんのお話ができる。言葉を覚えることで、世界が広がるんだと教えてくれた。すごくいい景色を見ることができた」

将来広い世界で活躍する夢を持つ選手のために、さらには人生を豊かにするためにも、コーチは選手に対して語学学習の必要性を説いてほしいものである。